

## いそつぶ物語

八

## 其四十六 蛇と人

一匹の毒蛇が、人の家の廊下の下に穴を作つて住んで居ましたが、ある時其穴から、出て来て、其家の子供を噛み殺しました、両親は、大層悲みました。が、お父さんは、よしと夫では一つ敵討に、彼の毒蛇を殺して仕舞はうと考へまして次の日、蛇が食物を求めて、穴から出ようとする處を持ち受けて、大きな手斧を以て、たゞ一討にしてやらうと構へましたが、殘念なことには、あまり狼狽たために、蛇の首を斬りふとすことが出来ないで、やつと尾の端を一寸斬り落とした丈けで逃がしてやりました。夫からと云ふものは、お父さんは、毒蛇が又自分をも噛みに來るのでないかと

思つて、急に恐くなつて來ましたから、とうべと仲直りをしようと思つて、少し許り御飯と鹽とを持つて行つて、其穴の口にやつて置きました、すると、彼の蛇は、ニユーワーと、穴から昔を出して來て申しまするには、

「ねー、お前さん我とは決して仲直りすることは出來ないじやないか、なぜかといふに、巳はお前さんを見る度に、巳の尾を斬り落された事を思ひ出し、お前さんは又、巳を見る毎に、息子の事を思ひ出すからだ」

## 其四十七 牡牛と屠牛者

ある時牡牛どもが、集つて會議をしました。そして、「どうも、彼の屠牛者といふ奴は、常に吾々を殺しに來る憎い奴だから、今度は、此方から彼

等を亡ぼさうではないか」といふ事を相談しまし  
た、そして、愈々其計劃を實行するといふ事に決  
めて、各自二つの角をとぎすまして居ますと、其の  
中で、一番年とつた牡牛が、皆に申しますには、  
「なる程、屠牛人が吾等を殺すには違ないが、  
然し夫にしても中々上手にやつてくれて、決し  
て無駄な苦を吾等にかけないと思ふ、今若し吾  
々が、彼等を亡ぼして仕舞ふといふと、彼等か  
ら殺されることは免れるにしても、其代り今度  
吾々は、下手な人の手にかゝつて死なねばなる  
まい、何故かといふに、縱令國中の屠牛者を残  
らず亡ぼして仕舞つた所が、人間といふ者は、  
其爲に牛肉を食へることを已めないからなあ」  
一害を以て他の害に代ふるは愚なり

鹽商人がある時、驢馬をつれて海濱に鹽を買ひに行きました。所が、其歸り道に谷川があります。  
其谷川を渡る時に、此の驢馬は、態と足を履み滑らせて忽ち、河の眞中でひっくり返りました。そして起き上つて來た時には、鹽は大方水で溶けて仕舞つて、其爲に大に荷が軽くなりました、商人は、仕方なしに元の所に引つ返して、も一度鹽を積み直して、さて其谷川の處に来ますと驢馬め、前と全じ目的で以て、又ひっくり返つて起き上る時に、荷物の重さを半分にして仕舞つて、丁度目的を遂げた様な風に、勇ましく、嘶いて居ます、そこで商人は、とうべく其惡戯を考へつひて、三度目に、全じ場所へ取つて返して、今度は、鹽の代はりに、海綿を一杯、驢馬の脊中に積み込んで戻りかけました。さて、谷川まで

来ますと、例の通り驢馬の奴さん、又ひよいと水の中にひつくり返りました、所が、今度は鹽と違つて海綿と來たから堪らない、だん／＼水が浸み込んで重くなる許り、起き上つて見て、さすがの驢馬も、之には弱り入つて、閉口しましたとさ、

## 其四十九 病氣の鹿

一匹の鹿が病氣で、森の隅の静な所に寝て居ますと、大勢仲間の鹿が見舞に來ました、しかし見舞に來たはよいが、病氣の鹿が、食べる爲めに取つて置いた食べ物を、皆で分けて食べて仕舞いました、それがために、此鹿はどう／＼死んで仕舞つた、病氣の故ではない、食物がなくなつて、悪友は利益よりも寧ろ害悪を持ち來ること多い

いつも／＼盜賊猫がやつて來ては、自家の鶏を捕つて行つて仕様がないから、よし／＼今に殺してやらうと思つて、牛肉の中に毒を入れて、庭に投げて置きました所が、鳥めが、屋根の上から、これは甘いものを見つけたと、喜んでくはへて木の上に飛び上りました、すると、狐か其處へやつて来て、鳥め、甘い物を持つて居る、一番だまかして取つてやらうと思つて、極めて丁寧な調子で

狐「これは、神様の御使鳥さん、其後はまことにしばらく

鳥「あなたは、私を誰だとお思ひですか

狐「左様、あなたはあの鷺さんでせう、いつも神様の所から、お使に來て、私の所へ甘いものを持つて來て下さる……

これを聞いて、鳥は、さては狐は己を鷺と間違つ

狐と鳥